

災害に対する立川市の対応を憂える

瀬戸昌之(日の出の森・支える会代表)

はじめに

災害時に地下水を利用することはすでに提案されている。

たとえば、以下は瀬戸のコラム(毎日新聞、オピニオン、2016年5月8日掲載)である。

「地震の被災地などにおける給水管の破壊や停電は、用水の供給を困難にし、被災者を苦しめる。道路が寸断されていなければ、給水車が飲料水を運ぶことはできる。ただし、洗濯・入浴などのための水は現地で調達せざるをえない。

深さ10メートル程度の地下水は清澄かつ豊富で、手押しのポンプでくみ上げられ、さまざまな用水として利用できる。しかしながら、かつて家庭などに広く普及していた井戸が、今は封鎖・廃棄され、地下水の利用はほとんど行われていない。

災害の多い日本では地下水がいつでも利用できる体制を復活すべきではないか。まずは、手押しのポンプを小中高校や公共の施設などに設置し、災害時の水を確保しよう。また、地域の人と井戸の利用・管理を考え、さらに、地下水の涵養と洪水防止の関りを考えよう。これらを通じて、われわれの水環境を考える輪も広げたいと思う」。

1. 立川市議会に手押しポンプの設置の陳情

たちかわ・財政を考える会、会長増田正三郎、は地震災害時の水の確保のために、小中学校の避難所などに「手押しのポンプ」設置を立川市議会に陳情した。この陳情は2回目に採択された。しかしながら、いつまでたっても、設置が行われない。調べてみたら、あきれた実態が判明した。

議会事務局が議会採択を勝手に「白紙」に戻していたのである。その理由は、「設置に膨大な費用がかかる。災害時にはプールの水を使えばよい。地下水は汚染しているから使えない」などとしていた。これらの理由はすべて誤情報・稚拙な思い込みの上に描かれていた。

何ともやりきれないのは、「議会」という市の最高決定機関の「採択」を事務局が勝手に白紙に戻す暴挙を行っていたことである。さらにあきれたことに、立川市議からもこの事務局の暴挙を諫める声が聞こえないのである。

2. 先駆的な市民活動

小平市で災害と水問題を長年研究している団体がある(NPO 法人小平井戸の会代表 金子尚史)。この会は災害時の地下水利用を克明な現地調査、科学的な水文学を基本に長年の実績を積み上げている。「災害に有効な井戸(小平井戸の会) 改訂版 2024年」は写真やイラストをふんだんに工夫して、視覚に訴えながらわかりやすく解説し、たいへん有益なパンフレットである。

余談ではあるが、避難所のトイレが水がないために汚物が流せない。そのために汚物があふれている現地の写真はおぞましい。いっぽう、地下水が使えるところでは人びとは洗濯したり、体を洗ったりして、何とか災害に対処する姿が印象的であった。これらを見て避難所で手押しのポンプが利用できることはどれほどありがたいことかを改めて感じた。

3. 地下水をめぐる学習会

災害時の手押しポンプの有用性・問題点の理解をさらに深めるために、以下の学習会を開いた。

○開催日と会場;2025年5月31日(土) アイム(立川市女性総合センター)

○主催;たちかわ・財政を考える会、 共催;日の出の森・支える会

○テーマ;「立川市の小・中学校校庭への手押しポンプ式井戸設置に向けて」、
話題提供者 小平井戸の会 金子尚史

この学習会ではさらに国土交通省の「災害時地下水利用ガイドライン、2025 年 3 月」の内容も紹介された。これらの情報を総合して、財政を考える会の立川市議会への陳情書の内容は極めて適切であったと再確認した。すなわち、たちかわ・財政を考える会の陳情書には議会事務局が言うような撤回すべき不備は何らなかったのである。

おわりに

人は地震をとめることはできない。被害を小さくすることはできる。様々な対応の中で避難所の水の確保は最優先すべきである。災害は地震に限らない。地球温暖化が誘起する山火事、洪水害の激化なども国内外を問わず多くの人を苦しめ、人命を奪っている。これらに対応するために、公的機関が率先して、災害を最小にするリーダーシップを発揮すべきである。そのためには専門家との連携のみならず、市民の声を積極的に組みあげ、災害に「先手」を打つ見識が公的機関には問われているのである。

2026 年 1 月 24 日(土) 14:00-16:00

～環境と健康を脅かすマイクロプラスチック汚染～

場 所：小平市中央公民館ホール

講 師：東京農工大学農学部名誉教授 高田秀重さん

資料代：500 円

主催：小平・環境の会 協賛：中央公園改修に市民の声を届ける会

<高田秀重さん プロフィール>

専門は環境汚染化学。1998 年からプラスチックと環境ホルモンの研究を開始。2019 年、キャンパスの自販機からペットボトルを一掃し、学内にマイボトル用給水器を設置した「東京農工大学プラスチック削減 5R キャンパス」を提唱・実施。国際プラスチック条約制定のため、専門家として参加、活動している。

2025 年 2 月 3 日の NHK クローズアップ現代「人体からプラスチック粒子が・・・懸念される健康リスク」に出演。

主な著書：『環境汚染化学』共著 丸善出版（2015）、『地球をめぐる不都合な物質』共著 講談社（2019）。『分別が楽しくなる！ごみと資源のリサイクル』 新日本出版社（2025）などを監修。